

本号のテーマ：「今年のベストセラー」考

長野県出身で著名なジャーナリストである池上彰さんは、NHK出版の「100分 de 名著」の中で、「いま、君たちに一番に読んでほしい本」として、吉野源三郎著「君たちはどう生きるか」を選び、こう紹介しています。

「ひとことで言うなら、これは子どもたちに向けた哲学書であり、道徳の書。人として本当に大切なことは何か、自分はどう生きればいいのか。楽しく読み進めながら自然と自分で考えられるよう、いくつもの仕掛けが秀逸にちりばめられています。」

こうしたこともあってか、先般の新聞記事によると、今年のベストセラー（日販）の第1位は、「漫画 君たちはどう生きるか」で、発行部数は200万部を超え、同時発売の原作小説も9位に入っています。



ところで、現代の若者が生きるネット社会は、

- ① ネットでつながりあうことで考え方が同じ方向に傾きやすい。
- ② メールや SNS にはまってしまうと、実社会での人と面と向かって行うコミュニケーション能力が低下してしまう。
- ③ インターネットに時間を取られ、自分自身の頭で考える時間が確実に減少している。
- ④ 長い文章を読む機会が減ることにより、美しい言葉に出会う機会が減少している。
- ⑤ 思考内容も単純に 0（ゼロ）か 1（イチ）かといったシンプルなものに変わって来つつある。

という弊害が指摘されています（森田幸孝著「インターネットが壊した『こころ』と『言葉』」）。

こうした状況の中で、人はどう生きるべきかという普遍的哲学的テーマの本が売れているということはある意味不思議で、ある意味ホッとしています。さらに、この本を題材にした池上彰氏の特別授業後の感想文で、ある中学生は「いまの社会には、メディアからの一方的な情報をうのみにして思考するのをやめた人が多いように感じる。確かに数が多い方につくのは楽である。しかし本当にそれでよいのか。いろいろな情報が行き交い、簡単に入手できる今だからこそ、その情報を取捨選択し、自分の

しんを持つことが大切だと思う。」と綴っていて、改めて若者の持つ社会に対する真摯な姿勢とその感受性、吸収力の強さに感心させられました。

そして、翻って言えば、この本を今一番読むべきは大人ではないかとも思います。大人こそが、いじめのこと、勇気のこと、貧困のことなどの今も昔も変わらないテーマに真剣に向き合い、自分の頭で考え、それを若者に伝えていくこと、そしてさらに若者と一緒に考えて事柄を前に進めていくことが必要なのだと思います。

教育委員としても、報告にただ頷くだけでなく、なぜそのことが起こったのか、問題は何か、こうしてみたらどうかといったことを、自分の頭で考え、判断し、発言するという姿勢を取り続ける必要があるという思いを新たにしました。